

初級後半日本語の授業におけるオンライン・ツールの使用

—ICU 夏期日本語教育での実践から—

小澤 伊久美

1. はじめに

2015年度ICU夏期日本語教育(以下SCJ)のC3は初級終了段階のコースであるが、C3の学習項目が変更されたことを受け、前年度のC3よりも進度が速く、扱う項目の多い形で運営されることとなった。一方で、23名の受講生はアメリカおよびカナダの大学に在籍する大学生だが半数は漢字圏出身、日本語の既習歴も専攻も様々であった。また、プレースメント・テストや授業初日の学習者の様子から、C3までに既習であることが前提の文法表現や漢字などが未習の者が1/3ほどいること、得意・不得意な技能にも大きなばらつきがあることなど、多様な日本語力の者が混在している状況が見られた。

そのような学習者の日本語力の差異に対応するために、今年度は1日3コマある授業のうち2コマを全て3セクションに分け、固定した担当教員のもと10名以下の少人数制クラスとし、3コマ目はコースヘッドのもと、23名全員で学習するという形を取った。少人数制のクラスでは各課の目標となるタスクを主として口頭でのやりとりを通じて練習し、全員でのクラスでは主として読み書きや聞き取りの練習を行った。後者においては、全てを一斉型授業にすることはせずにオンラインのツールを活用して学習者への個別対応を心懸けた。

ICTの発展とともに様々なオンラインのツールが開発されてきたが、その中でも学習管理システム(learning management system、以下LMS)は、教材を含めた種々の情報の配信、課題の管理を一元的に行うことができるなどの利点がある。日本語教育のコースにおいても、クラス全体にオンライン上で情報を一括して示したりすることが増えてきているが、LMSには単なる情報共有以上の機能がある。ICUが通常学期使用しているLMSはmoodleであるが、SCJでは使用できないため、今年度のC3ではEdmodoというLMSを用いた。

本稿ではEdmodoと、それに組み合わせて使用したLingtという2つのツールの特徴¹を指摘し、それらのツールの利点、使用上の留意点を教師による振り返りとして報告する²。

2. Edmodo < <https://www.edmodo.com/> >

2.1. サイトへのアクセス

2008年にイリノイ州シカゴにある二つの学校地区の教員が、互いの学校の生徒の日常生活や授業の様子を情報交換する目的で設立したEdmodoは、2016年2月現在6300万人弱のユーザーを持つ無料のLMS³である。K-12レベル(幼稚園から高校卒業段階)の教育機関においては世界最大規模のネットワークを形成しているという。

教師はEdmodoに自由にコースを開設して教材などを配信し、そこに学習者を登録さ

せる形で使用する。コース内の教師と学習者は同じ機関に所属している必要はないので、SCJのように様々な機関に所属している教師と学習者が1つのコースを構成することができる。

教師も学習者もメールアドレスと個人プロフィールを登録するだけでアカウントを開設することができる。教師が Edmodo 内に自分のコースを立ち上げた後、コース登録用のクラスコードが自動的に設定されるので、そのコードを用いて学習者は当該コースに入る仕組みである。なお、コースには複数名の教員を登録することができるが、今年度の C3 では、教師として登録したのは筆者1名である。

Edmodo では、コースの画面が学習者ユーザーからはどのように見えるかをコース管理者である教師の側で確認することができないが、自分が学習者として用いたことのないツールの場合、この機能がついていないのは使いにくいように思う。筆者は教師アカウントの他に、別のメールアドレスを使って学習者として登録し、自分のコースの履修者として振舞うことができるようにして、教材の見え方などを確認するようにした。

Edmodo のサイトには、コンピュータからブラウザを介してアクセスすることもできる他、iPad などのタブレットやスマートフォンなどのモバイル機器からアプリを介してアクセスすることもできる。C3 では対面授業の中で利用することがほとんどであったので、コンピュータからのアクセスが基本となったが、学習者たちは授業外では様々なデバイスからアクセスしていたようである。毎朝ホームステイ先からの通学中に、モバイル機器でアクセスして通知の確認や教材利用をしていた学習者もいた。

教師も学習者も設定画面で、Edmodo のコースに情報が配信された時にメールで通知を受け取るオプションを選ぶこともできる。これは便利な機能であるが、学習者が一日に非常に大量の同種のメールを受け取っていることを考えると安易に情報配信しない配慮が必要だ。

2.2. Edmodo での情報や教材などの配信

Edmodo では、学習者に対する告知や教材などは、学習者の Timeline 上に配信される。投稿のうちの1つだけはコース全体の最上部に貼り付けておく形（“pinned post” と呼ばれる：図1参照）をとることが可能であるが、基本的には新しい情報が投稿されると古い情報は次々と下へ流れ続ける仕組みとなっており、Facebook や Twitter、Google plus などのソーシャル・メディアと同じような情報配信の形である⁴。

ただし、教師がコース登録者とファイルを共有するためのフォルダーは提供されており、常に参照してほしいファイルをそこにしておくことが可能である（図2）。C3 では語彙リストや復習用教材などを頻繁に配布したが、次々と配信される流れの中で見失ってほしくないものであったため、フォルダーで整理する形を取った。

情報配信の際には日時を指定した予約配信⁵が可能である。C3 では教材や課題は全て事前に配信予約をしておくようにした。

2.3. Edmodo で配信できる課題

Edmodo 上の投稿は、大きく、“Note (お知らせ)”、“Assignment (課題)”、“Quiz (クイズ・

小テスト)、“Poll (投票)”の4つの形式に分けられる。C3では投票機能を利用することはなかったが、これはクラスの学習者全員に何か質問を投げかけて、選択肢から回答を寄せてもらうものである。

課題やクイズは、投稿する際に締切りの日時も指定することができ、その締切は学習者のカレンダーに自動的に表示される。また、成績の記録は自動的に保存され、学習者もその記録を確認することができる。保存された成績データは教師が必要に応じて記録を修正したりダウンロードしたりして用いることが可能である。こうした機能は教師にとって便利だけでなく、学習者が自らの学習を振り返ったり予定を立てたりするのにも役に立つものである。

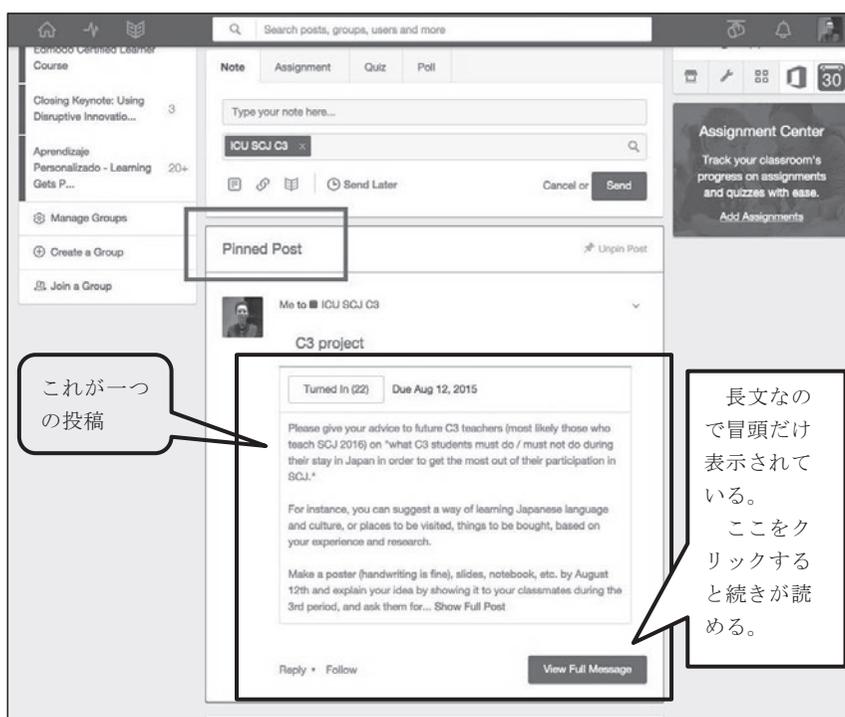


図1 EdmodoのC3のPinned Post



図2 Edmodo の C3 の Timeline の最上部にある共有フォルダー

課題では、文書の他に画像や音声データ、ウェブ上の情報へのリンクを添付することができる。クイズはそれに対して、後述のように穴埋め問題、選択式問題、正誤問題、マッチング問題、自由記述問題という5つの形式のテンプレートが用意されている。作成したクイズは再利用可能であり、必要に応じて加筆修正をすることもできる。また、課題もクイズも、課題終了までの時間を設定したり学習者による提出後の回答編集を不可としたりすることが可能である。解答時間は記録に残るため、一種のポートフォリオとしても活用できる。

C3では、クイズ機能を用いて、次のような課題を作成した。

① 漢字語彙

所要時間(図3の例では13問に対して5分間)を設定し、新出漢字を用いた漢字語彙の読み方を、ひらがなでタイプして解答させるという形で出題したが、自動採点を可能にするために空欄穴埋め形式を利用した。

問題作成は簡単で、教師が問題文を入力する際に下線符号(アンダーバー)を押した箇所が空欄となって穴埋め問題文ができ上がり、その空欄にあてはまる正答を別途入力すれば問題作成は完了する。

学習者が解答を入力して提出すると、解答が正答と全く同じであれば自動採点で得点がつく。自由記述文は自動採点されず、教師が手で採点する形を取る。両者は1つのクイズに混在させることが可能である(図3の例では13問中2問が手動採点であった)。どの問題に何点配点するかは作成時に決められる。

教師は、学習者が全問解答して提出した直後に、学習者に得点や所要時間、そして個々の問題について解答と正答とが表示される画面(図3)を閲覧させることができる。つまり、学習者に解答提出直後に自動採点によるフィードバックを与えることのできるのである。

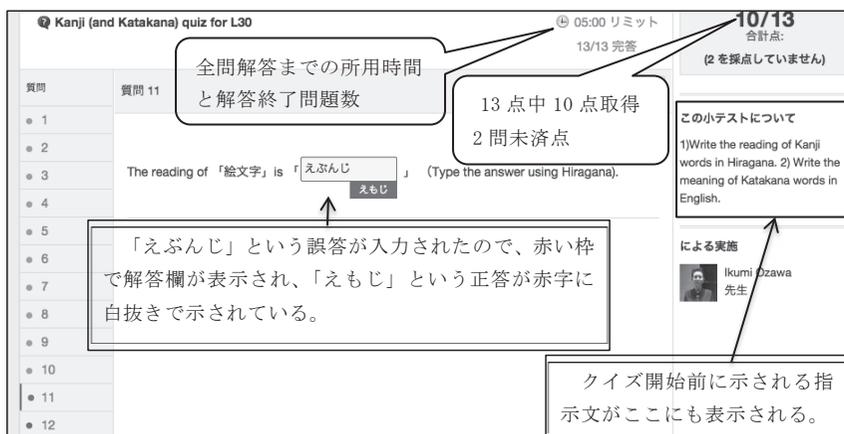


図 3 Edmodo のクイズ機能で作成した漢字語彙の読みを問う問題 (自動採点后に学習者が閲覧できる画面)

教師は、各学習者の問題ごとの解答状況が確認でき、コメントをつけて個別のフィードバックを与えることもできる (図 4)。また、個々の問題についてのコース全体の正答率など (図 5) も表示されるので、どの問題に誤答が多いかといった情報が簡単にわかり、指導のあり方を振り返ることができる。

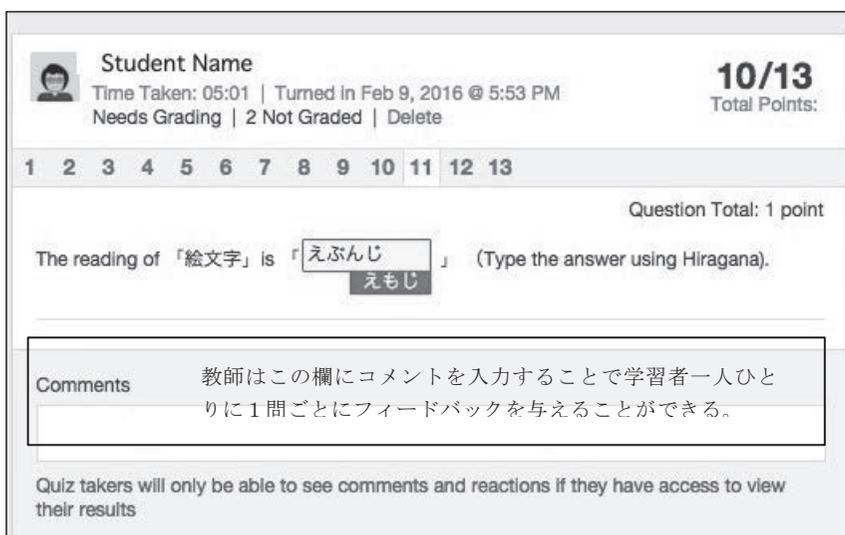


図 4 Edmodo のクイズ機能で自動採点后に教師が確認できる個々の学習者の解答状況

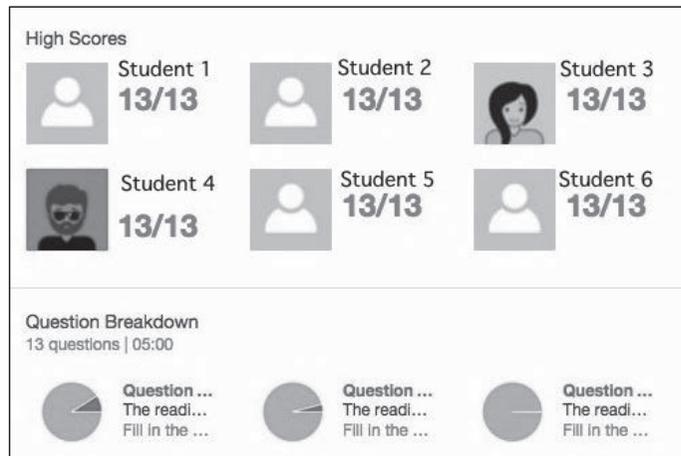


図5 Edmodo のクイズ機能で自動採点后に教師が閲覧できる全体の解答状況

② カタカナ語

所要時間を設定し、新出カタカナ語の意味を英語でタイプさせる形で出題した。正答となる英単語が一つとは限らないため、自由記述式で解答させた結果、解答送信後に自動採点をせず、教師が各学習者の解答をみて手採点する形となった。

③ 語彙

所要時間を設定し、短文中の空欄に新出語彙を入力させた。解答送信後に自動的に正答が表示される形式で、学習者は自分が何を間違えたかが確認できることなどは①と同じである。

自動採点では正答と全く同じ表記の解答のみが正答として扱われ、漢字仮名交じりにすると自動採点しにくいケースが出るため、ひらがなで解答することを義務付けた⁶。そのことによって漢字圏の学習者にとっては漢字の読み方を確認する問題となったが、動詞の活用部分や助詞までを含めて空欄とすることで、語彙の意味とともに文法的な要素も確認できる問題とした。自動採点の結果、図6のような画面が表示されるので、語彙そのものの選択を誤ったのか、読み方や助詞や活用形のいずれを誤ったのかということが、クイズ終了直後にわかることは学習者にとっても有効だったようだ。

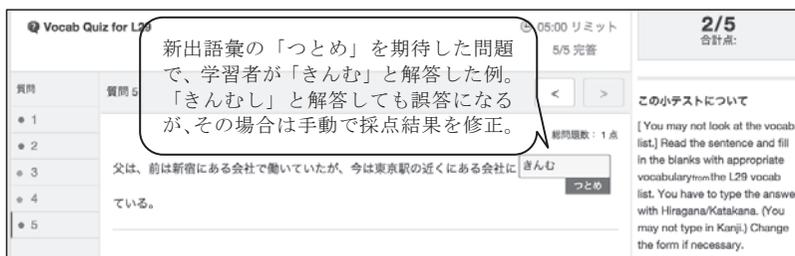


図 6 Edmodo のクイズ機能で作成した単語の意味を問う問題
(自動採点后に学習者が閲覧できる画面)

④ 聴解

ICU の初級教科書の音声教材（フォーメーション、ドリル、ロールプレイのモデル、読解教材本文の音読）が ICU の日本語教育課程のウェブサイト < <http://subsite.icu.ac.jp/jlp/text.html> > で公開されているが、残念ながら学習者にそれを紹介しても積極的に聞いてくれる者は少ない。そこで、これらの音声を素材にして聴解問題を作成した。なお、教科書の音声教材を利用したのは、他の授業で扱っているタスクとの整合性があり、語彙のコントロールでも大きな問題がないこと、ICU の教材であるので編集しても著作権の問題がないことなどの利点があったからでもある。

聴解問題は、お知らせ機能で音声教材を提示し（図 7）、クイズ機能で内容正誤問題（図 8）と短文穴埋め形式のディクテーション問題（図 9）を組み合わせで出題した。解答には制限時間を設けたのでじっくり聞いて解答することはできないが、正答を見ながら音声素材を何度も繰り返し聞けるので聴解が苦手な学習者は喜んで取り組んでいた。

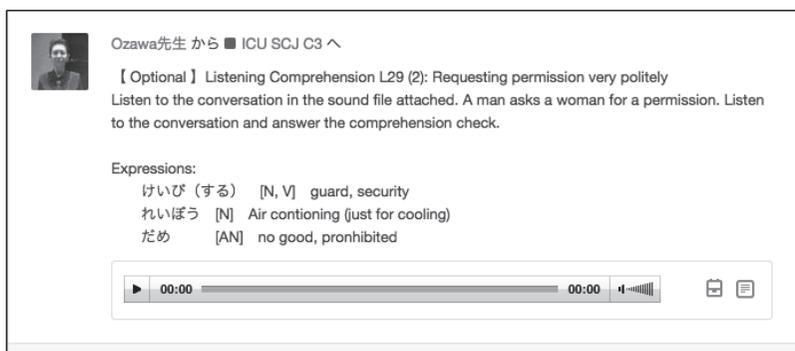


図 7 Edmodo のお知らせ機能で提示した聴解の音声素材と語彙など



図 8 Edmodo のクイズ機能で作成した聴解の正誤問題（解答後の学習者用画面）



図 9 Edmodo のクイズ機能で作成したディクテーション問題（解答後の学習者用画面）

⑤ 読解

教科書の読解本文や自作の読み物などを読ませた後の内容確認として、正誤問題や多肢選択問題、記述式問題を出題した。読解の内容につなげて作文を課したこともあった。

C3 では、このようなオンライン学習によって、学習者が個別学習に取り組む時間を毎日 20 分から 40 分ほど設けた。④以外の課題は必須とし、それを早く終えた学習者には別課題を提示した。早く課題を終える学習者には、漢字の読み書きや読解が得意な者が多く、聞く話す練習がもっとしたいという希望を持つ者が多かったので、④のような聴解教材や後述の Lingt を利用した会話練習に取り組めるようにした。学習者が課題に取り組んでいる間、教師は机間巡視しつつ個別に対応をした。各自が自分に必要だと思う内容を自分のペースで学んでいることが観察され、また、読み書きが得意な学習者も間違えた箇所を確認して理解を深めている様子がみられ、正答を見るだけでは十分理解ができない学習者にはつまずいた点に焦点をあてて指導することができた。

3. Lingt < <http://linglanguage.com/> >

上述のように Edmodo の 課題機能は、Edmodo 以外のツールで作成した教材を組み合わせ使用することも可能である。C3 で Edmodo と組み合わせて使用したツールの一つが Lingt である。本節では Lingt について紹介する。

Lingt は、2008 年から 2009 年にかけて立ち上がった言語教育のためのサービスで、学習者にもっと話す練習をさせたいという教師の要望に応え、特に音声の聞き取り・発話の練習に向けた機能を提供している。これも教師が自由にコースを開設して教材を配信し、そこに学習者を登録させる形で使用する。無料版は、作成できる課題の数やデータ保存期間に制限がある。

Lingt では、音声・文字・画像・動画などの素材を利用して課題を提示し、学習者はそれに対して文字あるいは音声によって解答を送ることができる。教師が課題を作成する操作は、アイコンをクリックするだけで済むものが多く、非常に簡便なものとなっている (図 10)。

学習者にとっても、提出前に何度でも録音しなおすことができる、自分の音声も聞き直すことができる、教師のフィードバックも繰り返しみたり聞いたりできるという利点がある。話す練習、発音の練習だけでなく、聞いて答えるというタスクにおいて聞き取りが不得手の学習者も少なくなかったが、Lingt で対話形式の課題に取り組むのは、そのような学習者にとって良い練習になったようだ。

具体的には、C3 では Lingt を用いて「①会話」「②スピーチ」「③音読による発音練習」「④聴解」などの課題を作成したが、これはいずれも音声を録音する機能を用いた課題である。Lingt の特徴は、①の会話練習課題を説明することで十分明らかになるため、本節では①の紹介をするに留めたい。なお、前述のように、これは授業中の必須課題としたオンライン学習が早く終わった学習者に自由に取り組める素材として提供した。授業中に取り組んだ者もいたが、授業中には時間がなかったが、課題に興味を持って授業外の自宅学習として取り組んだ学習者もいた。



図 10 Lingt の教材作成画面

① 会話

教師の音声をあらかじめ録音しておき、学習者はそれを聞いて、教師を対話の相手ととらえて自分の発話を録音するという形の課題である。学習者が色のついた吹き出し（図 11 左側）をクリックすると録音済みの音声の流れ、学習者はそれに対する答えをもう一方の吹き出しをクリックして録音する（図 11 右側）。これによって、教師を相手にした対話のような練習ができる。

実際の対面での練習と異なり、教師の発話が聞き取れない場合には何度も音声を聞き直すことができ、また、学習者の発話についても何度も録音し直すことが可能である。音声だけでなく文字・画像・動画などの素材も添えられるので、課題の難易度などを調整することも可能である。図 11 の例では、初めの問いは「ICU のキャンパスはありますか」、二番目の問いは「ICU はあなたの大学と同じですか。違いますか。」というものだが、対話の状況や語彙などを文字情報で補足して提示している。その点では自然な対話とは異なる形式となるが、会話のやりとりに慣れないと感じる学習者や、発音に自信がない学習者が好んで取り組んでいた。

インタビューテストの前には、模擬練習のような形で質問に答えるという練習問題も作成したところ、授業外で複数名が利用していた。結果として、インタビューテストの際に聞き取れなくて答えられないという状況を回避するのに貢献したようである。

教師は学生が録音した音声やタイプした文字を確認し、個々の学生にフィードバックを送ることができるが、音声でコメントをするか文字によるかを選ぶことができる。図 12 は、図 11 で例に挙げた発話課題について提出された音声を確認する画面である。学生一人ひとりについて、課題提出時刻が記録されている。三角のマークをクリックすると、学習者が提出した録音音声を聴くことができる。その隣にある薄い色のアイコンは、フィードバックを与えたい時に使うもので、左の四角のようなアイコンをクリックすると文字入力欄が開き、右の吹き出しをクリックすると音声入力ができる。教師は、一つの課題について何度もコメントをつけることができるため、文字と音声の両方によってコメントをすることも可能である。

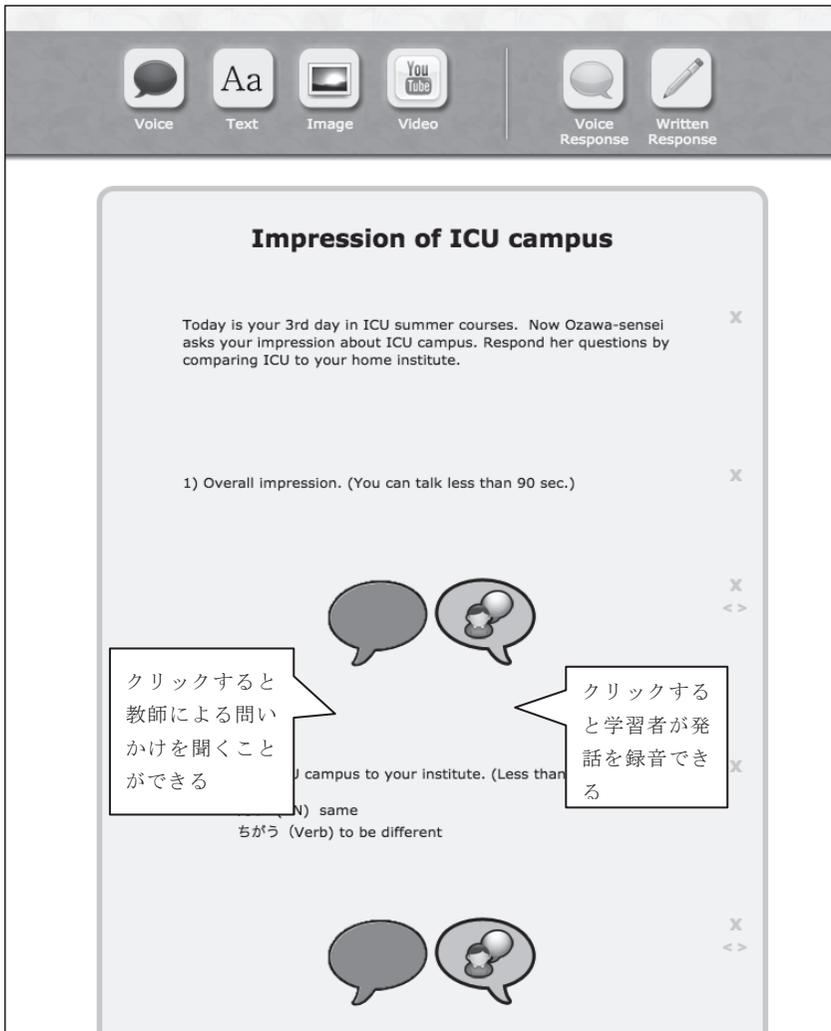


図 11 学習者が教師に ICU の印象を聞かれるという設定の会話の課題

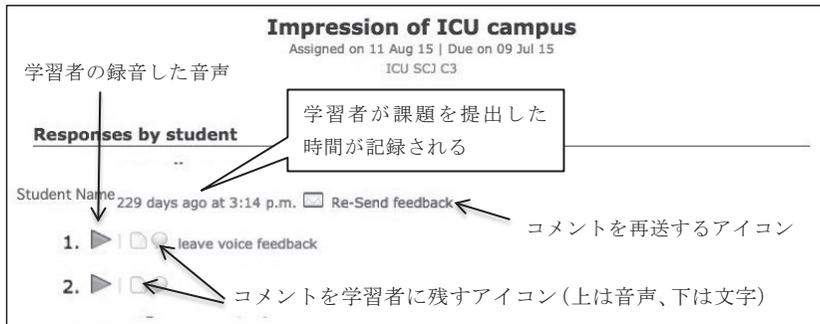


図 12 Lingt で教師が学習者の課題を確認してコメントをつける画面

教師からコメントがついたことは学習者にメールで通知される。コメント（文字・音声ともに）は Lingt のサーバーに保存され、それらと学習者の提出物とをまとめたサイト（図 13）へのリンクがメールで送信される仕組みになっている。学習者は左の吹き出し（実物は青色で表示される）をクリックして教師の問いを確認し、右の吹き出し（実物はオレンジ色で表示される）をクリックして自分の提出した録音音声を確認することができる。そして、左下にある三角のアイコンをクリックすると自分の発話に対する教師のコメントを聞くことができるようになっている。

音声でフィードバックできるのは、発話の指導、発音の指導において大変便利であった。

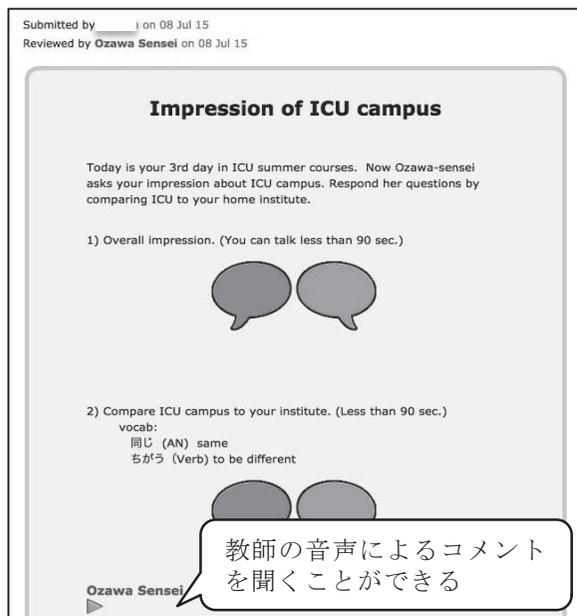


図 13 Lingt で学習者が教師のコメントと提出した課題の内容を確認する画面

4. おわりに

2015年度のC3のコースでは、日本語力の強い側面、弱い側面がさまざまである23名全員にとってできる限り時間を有効に使うために、オンライン学習に取り組む時間を積極的に設けた。その時間には本稿で紹介した各種ツールを利用した教材を用意し、基本的には教師の手助けを受けずに各自が課題に取り組み、教師は必要に応じて個別の学習者の支援をするために机間巡視をした。

結果として、各自が自分に与えられた時間を無駄にすることなく、集中して学習に取り組む姿が確認され、授業中に終わられなかった課題に授業外で取り組んでいる学習者も少なからず存在したことが見てとれた。また、課題との向き合い方については、それぞれが自分の得手不得手を認識して課題を選択している様子、課題提出後に自動的に表示されるフィードバックからも学んでいる様子が観察され、自分の学習を見つめ直す時間としても機能していたようである。また、個別学習の結果は自動的に集計されて記録に残るので、学習者にとっても教師にとっても学習の様子が把握しやすくなり、教師は個々の学習者の学習上の課題を含め、授業運営に生かせるフィードバックを得やすいという利点があった。

しかし、これらのツールを使う上での留意点も同時に観察された。一つは、Edmodoなどのサービスが非常に便利であるとはいっても教材作成にはそれなりに時間がかかり、担当教員の負担が軽減されるとは言い難いということである。教材作成だけでなく、個別学習の結果として個別にフィードバックをする機会も増えるので、添削やフィードバックにかかる時間も増える可能性がある。授業外に取り組む課題が用意されたことで、学習者にとっても負担が大きくなりすぎないように、適切な学習時間を想定して課題を出す配慮も必要であろう。初めてのツールを使う際には、学習者に対する使用法のサポートも生じる可能性がある。

現状ではこうしたツールの利用は、教育機関によってサポート体制が異なり、SCJの場合はまだまだ個々の教員に頼るところが大きいのが、本稿の報告がそうした教員の一助となることを願うものである。

注

- 1 本稿に記載したツールなどの情報は掲載時のものであり、その後変更となる可能性がある点に留意されたい。
- 2 学習者による授業評価は回収率が低かったため、本稿では取り上げなかった。
- 3 Edmodoによる教師用のワークショップやアプリの中には有料のものもある。
- 4 特定の学習者に限定した情報配信が可能であることもFacebookなどと同様である。異なるのは保護者も自分の子どもの学習記録にアクセスすることが可能な点である。大学などの高等教育機関よりも中等教育機関で広く利用されているということが背景にあるのであろう。
- 5 30分単位での指定となる。
- 6 学習者が漢字仮名交じり文で解答した場合には自動採点では誤答になるが、教師が成績の記録を修正することは可能である。